

夫婦関係に及ぼす葛藤対処方略の影響： 行為者 - パートナー相互依存モデルに基づく検討

周 玉慧 深田博己
(台湾中央研究院) (広島文教女子大学)

本研究では、夫あるいは妻の個人内の影響過程、および夫と妻の間の相互影響過程に注目し、行為者 - パートナー相互依存モデル (APIM) を用いて、夫と妻が直面した葛藤、用いた葛藤対処方略、彼らの結婚生活の質の間の関係を検討した。342 組の台湾人夫婦を対象とし、夫婦間葛藤の程度、葛藤対処方略 (協調的話し合い、沈黙・冷戦、回避・我慢、非難・口喧嘩、暴力・不満表出、第三者調停依頼、懐柔・哀願の7つの一次因子、および対話、回避、攻撃の3つの二次因子)、および結婚生活の質 (充実度と後悔度の2側面) を測定した。その結果、夫婦間葛藤、攻撃方略、および結婚の質は夫婦間で有意に異なっていた。APIM の分析結果から、対話方略は行為者自身と配偶者の結婚の質に対し直接的影響と媒介的影響を及ぼし、対話方略には行為者効果とパートナー効果が存在することを解明した。そして、回避方略と攻撃方略は個人内でのみ結婚の質に対し直接的影響と媒介的影響を及ぼし、行為者効果のみが存在することを明らかにした。また、APIM におけるカップル志向モデルや社会的比較モデルの妥当性も実証した。

キーワード : 夫婦間葛藤、葛藤対処方略、結婚の質、夫婦カップル、行為者 - パートナー相互依存モデル

問 題

本研究の目的は、夫と妻が直面した夫婦間葛藤、用いた葛藤対処方略、彼らの結婚生活の質の間の相互影響関係を検討することである。具体的には、夫婦ペアの相互影響の視点に基づき、“行為者 - パートナー相互依存モデル” (Actor-Partner Interdependence Model, 以下 APIM; Kenny, Kashy & Cook, 2006) という分析手法を導入して、夫あるいは妻の個人単位およびペア単位の影響パターンと相互影響パターンを分析し、後述する4種類の APIM 比較モデルの妥当性を検討する。

夫婦間葛藤と葛藤対処方略

結婚生活の中の葛藤とその対処方略に関する研究は、家族心理学者や家族社会学者が関心を寄せ

る重要なテーマである。妻と夫は互いに最大の満足源でもあり最大の葛藤源でもあり (Argyle & Furnham, 1983)、夫婦間関係の中では、実に多様な領域で問題や対人葛藤が生起している (Gottman, 1979)。飛田・大淵 (1991: 飛田, 1997 による) は、大学生の子どもを持つ夫婦が、親や子どものこと、近所との関係、休日の過ごし方から老後の生活設計まで、実にさまざまな領域で対立を経験していることを報告している。先行研究では、夫婦間葛藤を一種のストレスと見なして

(Lee-Bagley, Preece & DeLongis, 2005)。葛藤それ自体は必ずしも夫婦関係に悪影響をもたらさない。適切な対処方略を使用すれば、夫婦間の緊張感を緩和させ、結婚の質を上昇させることも考えられる (Dadds, Erin, Cynthia, John & Bernice, 1999; Proulx, Helms & Buehler, 2007)。

葛藤対処方略における分類方法は極めて多様である。例えば、多次元尺度法を用いた Falbo & Peplau (1980) は、脅迫、泣く、暗示、説得、命令、暴力などの葛藤対処方略を“直接-間接”と“一方向-双方向”の2次元4類型に分類し、直接かつ双方向の方略が好ましい効果があることを発見した。関心の焦点が個人自身にあるか対人関係にあるかの2次元の分類基準を用いた Rubin & Graham (1994) は、葛藤対処方略を回避 (avoidance)、競争 (competition)、慰め (soothing) および問題解決 (problem solving) の4類型に分類した。また、Pruitt & Carnevale (1993) は、葛藤対処方略を回避 (avoiding)、譲歩 (yielding)、論争 (contending)、妥協 (compromising) および協調 (collaborating) の5種類に分類し、恋愛関係に焦点を当てた Howard, Blumstein & Schwartz (1986) は、因子分析法により葛藤対処方略を、操作 (manipulation)、脅迫 (bullying)、撤退 (disengagement)、哀願 (supplication)、主張 (autocracy) および取引 (bargaining) の6種類に分類した。

日本では夫婦の葛藤対処方略を検討した研究がいくつか存在する。例えば、飛田・大淵 (1991: 飛田, 1997 による) は、大学生を子どもにもつ日本人夫婦の間に対立や葛藤が生じたときの対処方略を調査し、次のような結果を見出した。夫は、自分では“我慢して、対立を避ける”、“穏やかに説得する”、“黙り込む”といった方略を使用していると思っているが、妻は、夫が“言い張ったり、命令したりする”、“黙り込む”などの方略を使用していると報告した。これに対して、妻は、自分では“相手に妥協する”、“我慢して、対立を避ける”、“黙り込む”といった方略を使用していると思っているが、夫は、妻が“黙り込む”、“我慢して、対立を避ける”、“泣いたり、怒ったり、感情的になる”といった方略を使用していると報告した。

台湾人夫婦を対象とした林・深田・児玉・周 (2003) は、親密度と葛藤解決方略が結婚満足度に及ぼす影響を検討した。葛藤解決方略を統合、交渉、支配・攻撃、同調・回避、第三者介入の5種類に分類した。相関分析の結果から、夫あるいは妻が統合方略を、また夫が回避・同調方略を多く使用すれば、使用者自身の結婚満足度が高くなるが、夫あるいは妻が支配・攻撃方略や第三者介入方略を多く使えば、使用者自身の結婚満足度が低くなること、そして、夫が統合方略や支配・攻撃方略を多く使うと、妻の結婚満足度が高くなり、妻が統合方略を多く使うと、夫の結婚満足度が高くなる一方、妻が支配・攻撃方略を多く使うと、夫の結婚満足度が低くなることが示された。

インターネット上のサービスである“Yahoo! 知恵袋”に寄せられた情報を使用した川島 (2013) は、日本の夫婦間葛藤事件や葛藤解決方略の実態をまとめた。その結果、葛藤事件としては、配偶者の個人内要因 (人格、癖、行動)、子ども関連 (育児、子どもの問題など)、性にまつわる問題 (婚

外交渉含む)、拡大家族(両親、義理の両親など)、金銭的問題などが挙げられ、解決方略としては、謝罪、妥協(あきらめを含む)、何もしない・普段通り、気分転換・話題転換、身体接触(性的接触を含む)、プレゼント・外食、復讐、子ども関連(子どもは“かすがい”)などが挙げられた。このように、欧米の葛藤対処行動尺度(CTS2)や夫婦関係性攻撃尺度(CRAViS)に含まれるすべての行動が見出され、夫婦間葛藤は、文化間である程度共通している可能性が示された。

日本と韓国の既婚女性を対象とした俞(2014)は、夫婦間の葛藤解決方略と結婚満足度との関連を検討した。彼女は、先行研究の分類に基づき、解決目標を他者指向性と自己指向性の2軸に分け、解決方略を主張、協調、妥協、回避、譲歩に分類し、子育て、家事の分担、生活習慣など各々の葛藤場面においてどのような葛藤解決方略を選ぶかを両国の既婚女性に尋ねた。その結果、両国の既婚女性はともに、30%以上の方が協調方略を選択し、次に約25%の人が回避方略を選択していた。葛藤解決方略と結婚満足度との関連については、両国間には有意差はなく、全体的に、妥協や協調方略を選択する人の方が結婚満足度はより高く、主張方略を選択する人の方が結婚満足度はより低いことが示された。

上記の研究の結果はかなり一致しており、話し合い、協調、理性といった方略は葛藤の影響を緩和させ、関係を改善させる機能を持ち、逆に喧嘩、攻撃、回避、利己的などの方略は葛藤の影響を強めて、関係を悪化させる機能をもつと言える。

夫婦間葛藤対処方略の対応性・相互性

また、夫婦間の方略に関する先行研究では、方略の使用頻度あるいは使用類型について夫と妻の間に何らかの対応性・相互性があると指摘している(熊谷, 1979; 黄・葉・謝, 2004; 周, 2009; 周・深田, 2011)。日本・インド・アメリカ3カ国の高校生を対象とした熊谷(1979)は、彼らの両親の葛藤解決方略(コミュニケーションをとる、喧嘩する、殴る)に対する知覚を評定させた。その結果、国にかかわらず、高校生の目からみると、両親が使用する葛藤解決方略の中で、話し合いの使用頻度が最も高く、次は口喧嘩であり、暴力の使用頻度が最も低かった。そして、その使用頻度は両親の間で極めて類似しており、一方がコミュニケーションをとろうとすれば、他方もコミュニケーションをとりたがるという相互対応性のあることが示された。台湾人夫婦を対象とした黄他(2004)の研究は、夫あるいは妻が配偶者に対して用いた葛藤対処方略(協調、喧嘩、忍耐逃避、他者の援助)に関して、夫婦間に高い相関を見出し、夫婦間の方略使用の相互性を示唆した。

台湾人夫婦を対象とした周(2009)は、補助資料1に示した24項目7因子(協調的話し合い、沈黙・冷戦、回避・我慢、非難・口喧嘩、暴力・不満表出、第三者調停依頼、懐柔・哀願)の葛藤対処方略尺度を作成し、台湾人夫婦ペアにおける葛藤対処方略の類型を“双方少用”“冷戦・喧嘩”“双方配慮”“双方多様”の4類型に分類した。そして、これらの類型のうち、結婚生活の質は、“双方配慮型”の夫婦が最も良く、“双方多様型”の夫婦が次に良く、“冷戦・喧嘩型”の夫婦が最も悪いことが示された。さらに、各類型に属する夫と妻が用いる対処方略はかなり類似しており、対処方略の使用類型には夫婦間に対応性が見られた。また、同様に台湾人夫婦を対象とした周・深田(2011)は、夫婦間サポート獲得方略の使用類型を“双方多様型”、“夫理性妻多様型”、“双方理性単一型”、

“双方配慮型”の4類型に分類して、サポート獲得方略の使用類型における夫婦間の相互対応性を見出した。

行為者 - パートナー相互依存モデル

類似性や対応性の強い夫婦カップルのペア・データは、まったく無関係な別の回答者のデータではなく、観測値の独立性が担保されないため、回帰分析や分散分析などを用いて分析するのは不適切だと指摘されている。対応のあるペア・データを分析する方法として、個人レベルとペア・レベルの分散を分割し説明したり、ペア・レベルの変数に及ぼす個人レベルの変数の影響を推定したりするには階層線形モデル（Hierarchical Linear Modeling）が適切な分析方法であり、個人レベルおよびペア・レベルでの相互影響関係を検討するには APIM がより適切な分析方法である（松永, 2012; 清水, 2014）。本研究では、夫婦間の相互影響関係を検討するので、APIM を選択することとした。

APIM とは、共分散構造分析の枠組を用いて、二者関係における変数の関係性を行為者効果（actor effect）とパートナー効果（partner effect）に分離させる手法である。自他の二者関係データにおいてある特定の変数を予測する場合、その特定の変数の予測には、自分自身からの影響と相手からの影響という2種類の影響を考慮することができる。自分自身からの効果を行為者効果と呼び、相手からの効果をパートナー効果と呼ぶ（Kenny et al., 2006）。夫婦関係で考える場合、行為者効果は、夫の側あるいは妻の側の独立変数がそれぞれ夫自身の側あるいは妻自身の側の従属変数に及ぼす影響であり（例：妻の葛藤度が妻の対処方略使用に及ぼす効果）、パートナー効果は、相手（配偶者）の側の独立変数が夫の側あるいは妻の側の従属変数の及ぼす影響である（例：夫の葛藤度が妻の対処方略使用に及ぼす効果）。

そのうえ、Kenny et al. (2006) は、夫婦間の行為者効果とパートナー効果を比較することにより、行為者志向（actor-oriented）、パートナー志向（partner-oriented）、カップル志向（couple-oriented）および社会的比較（social comparison）といった4種類の比較モデルが考えられると指摘した。行為者志向モデルでは、自分の側の従属変数は、自分の側の独立変数によってのみ影響され、配偶者の独立変数による影響がみられないと予測する。パートナー志向モデルでは、逆に、自分の側の従属変数は、配偶者の側の独立変数によってのみ影響され、自分の側の従属変数による影響がみられないと予測する。また、カップル志向モデルでは、自分の側の従属変数は、自分の側の独立変数と配偶者の側の独立変数の両方によって影響され、その影響度はほぼ等しいと予測される。しかし、社会的比較モデルでは、自分の側の従属変数は、自分の側の独立変数と配偶者の側の独立変数の両方によって影響されるが、その影響の方向は正反対であり、通常、行為者効果はプラス（正の影響）で、パートナー効果はマイナス（負の影響）であると予測される。

夫婦間葛藤対処方略における APIM の研究

APIM が提出されて以来、ここ十年間、APIM を用い、夫婦のペア・データを分析する欧米の研究が増えてきた。例えば、Givertz, Segrin & Woszidlo (2016) は、628 組の夫婦を対象として、コミッ

トメントが結婚満足度に及ぼす影響、そしてコミットメントと結婚満足度との関係を媒介する相互依存性の媒介効果を検討した。APIMの結果から、行為者効果（自分自身のコミットメント→自分自身の相互依存性→自分自身の結婚満足度）は、夫と妻ともに認められたが、パートナー効果については、妻に対する夫のパートナー効果は見られず、夫に対する妻のパートナー効果のみ見られた（妻のコミットメント→夫の相互依存性→夫の結婚満足度）。

しかし、夫婦間の葛藤対処方略の使用について、APIMを用いて検討した研究はそれほど多くはない。135組の夫婦から縦断的データを収集した El-Sheikh, Kelly, Koss & Rauer (2015) は、夫婦が相互に使用する葛藤対処方略（心理攻撃、身体攻撃、話し合い交渉）が自分自身の不安・抑うつ、および2年後の睡眠状態（効率、長さ、熟睡までかかる時間）に及ぼす影響を検討した。その結果、配偶者が用いた心理攻撃や身体攻撃という破壊的な対処方略は、夫と妻の双方の睡眠状態に対して直接的に長期的な負の影響を及ぼし、また不安・抑うつを媒介して間接的に負の影響を及ぼした。その一方、妻が用いた話し合い交渉という建設的な対処方略は、夫の睡眠状態に対して長期的な正の影響を及ぼしていた。

100組の夫婦を対象とした Papp & Witt (2010) は、夫と妻の情緒調節の仕方、夫婦間ストレス対処方略および関係満足度の関連性を検討した。APIMによる結果から、夫あるいは妻の情緒調節の仕方からそれぞれ夫自身あるいは妻自身の対処方略へ、自分自身の対処方略から自分自身の関係満足度へ、といった影響パスが有意であり、また、妻の対処方略から夫の関係満足度への影響パスが有意であることが示された。ただし、夫の対処方略と妻の関係満足度との関連は見られなかった。

平均結婚年数 40 年以上の 132 組の夫婦を対象とした Landis, Peter-Wight, Martin & Bodenmann (2013) は、自己報告、配偶者に対する知覚、およびその一致性の視点から支援的対処方略と関係満足度との関係を検討した。その結果、自身の支援的対処方略に関する夫と妻の自己報告は、夫と妻の双方の関係満足度を説明できなかったが、配偶者の支援的対処方略に対する夫あるいは妻の知覚は、どちらも、夫自身あるいは妻自身の関係満足度だけでなく、それぞれの配偶者の関係満足度も促進することが分かり、行為者効果とパートナー効果の両方が存在することが示された。

また、132組の夫婦を対象とした Barry & Lawrence (2013) は、逃避撤退という単一特定の対処方略に対する負の情緒の長期的影響を検討し、上記の研究とは異なる結果を報告している。すなわち、夫と妻の負の情緒は、どちらも夫の逃避撤退方略を予測できるが、妻の逃避撤退方略を予測できないことを見出した。すなわち、夫のみに対して、行為者効果とパートナー効果の両方がみられたことになる。

夫婦間葛藤、葛藤対処方略および夫婦関係の質を検討してきた研究は多くみられるが、APIMを適用しつつ、夫婦ペア単位に分析を行った研究はあまり多くなく、しかもその結果は必ずしも一致しているとはいえない。特に、葛藤対処方略の媒介効果および APIM の比較モデルを的確に検証した研究は見当たらない。

本研究の目的と仮説

先行研究の知見に踏まえて、本研究は、夫婦が相互依存的であるという観点から、夫あるいは妻

の個人内の影響過程と夫と妻の間の相互影響過程に注目しつつ、APIMによって夫婦間葛藤、葛藤対処方略および夫婦関係（結婚の質）の間の影響関係を検討することを第一の目的として、夫と妻の行為者効果とパートナー効果を考慮した図1のモデルを設定した。次に、APIMにおける4種類の比較モデルおよび葛藤対処方略の媒介効果を検討することを第二の目的とした。

過去の研究結果により、夫婦間の葛藤が大きければ大きいほど結婚の質が低下していくと推測できる。そして、自己報告の葛藤が自己の結婚の質の低下に関連し、配偶者報告の葛藤が自己の結婚の質の低下に関連することも考えられる。そこで、行為者効果とパートナー効果を考慮して、仮説1を設ける。

仮説1：夫と妻の葛藤度が高ければ高いほど、夫と妻の結婚の質が低くなる。

仮説1-1：自分自身の報告した葛藤度が高ければ高いほど、自分自身の結婚の質が低くなる。（行為者効果）

仮説1-2：配偶者の報告した葛藤度が高ければ高いほど、自分自身の結婚の質が低くなる。（パートナー効果）

次に、先行研究がすでに示唆してきたように、夫婦の用いる多様な葛藤対処方略が結婚の質に及ぼす影響は方略の種類によって異なり、結婚の質に対して、理性や交渉などのポジティブな対処方略は改善する効果を、回避や喧嘩などのネガティブな対処方略は悪化させる効果をもつ可能性が大きい。そこで、行為者効果とパートナー効果を考慮して、仮説2と仮説3を設ける。

仮説2：夫と妻の用いる理性や交渉などのポジティブな対処方略が多ければ多いほど、夫と妻の結婚の質が高くなる。

仮説2-1：自分自身の用いる理性や交渉などのポジティブな対処方略が多ければ多いほど、自分自身の結婚の質が高くなる。（行為者効果）

仮説2-2：配偶者の用いる理性や交渉などのポジティブな対処方略が多ければ多いほど、自分自身の結婚の質が高くなる。（パートナー効果）

仮説3：夫と妻の用いる回避や喧嘩などのネガティブな対処方略が多ければ多いほど、夫と妻の結婚の質が低くなる。

仮説3-1：自分自身の用いる回避や喧嘩などのネガティブな対処方略が多ければ多いほど、自分自身の結婚の質が低くなる。（行為者効果）

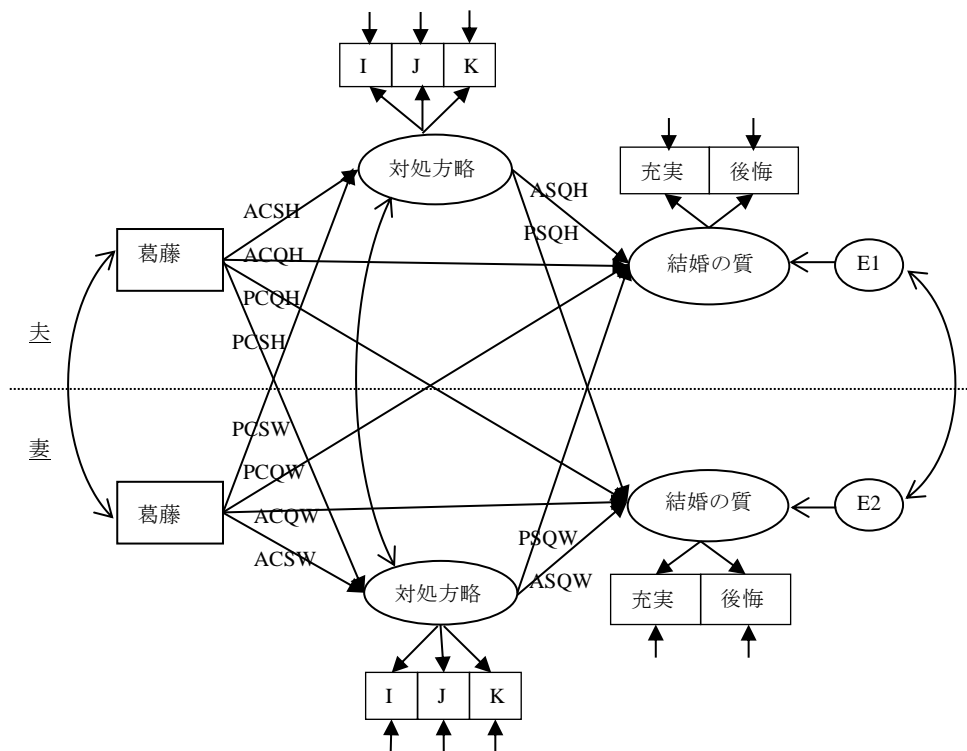
仮説3-2：配偶者の用いる回避や喧嘩などのネガティブな対処方略が多ければ多いほど、自分自身の結婚の質が低くなる。（パートナー効果）

さらに、葛藤対処方略は、夫婦間葛藤と結婚の質との関係に影響する媒介効果の機能をもっており、“葛藤→対処方略”と“対処方略→結婚の質”という間接効果のパスが仮定できると考えられる。ただし、こうした間接効果における行為者効果やパートナー効果については、現段階では予測し難いため、間接効果に関しては抽象度の高い仮説4を設ける。

仮説4：夫婦間葛藤は、葛藤対処方略を媒介にして、結婚の質に対して間接効果をもつ。

仮説4-1：理性や交渉などのポジティブな対処方略は、葛藤が結婚の質に及ぼす負の影響を減少させる。

仮説 4-2：回避や喧嘩などのネガティブな対処方略は、葛藤が結婚の質に及ぼす負の影響を増加させる。



注：Aは行為者、Pはパートナー、Cは葛藤、Sは対処方略、Qは結婚の質、Wは妻、Hは夫。

図1 葛藤対処方略における行為者 - パートナー相互依存モデル

方 法

調査対象者

調査対象者は台湾の台北市と新北市の342組の夫婦であり、2014年9月－2015年2月に一対一の個別面接法による質問紙調査を行った（注1）。対象者の内訳については、夫の年齢21－86歳（平均45.92歳）、妻の年齢21－79歳（平均43.20歳）、結婚年数0.5－59年（平均17.38年）、子どもの人数0－6人（平均1.80人）、家庭の平均月収は台湾円で約8万元（約28万5千円）であった。

測定内容

結婚生活の中での43項目のもめごと（葛藤的な出来事）、もめごとに直面したとき用いる24項目の対処方略、および2側面から成る10項目の結婚生活の質を、夫婦別々に測定した。

葛藤度

葛藤の程度については、楊（1996）、周（2001）および張（2001）などの先行研究を参考にして、飲酒や賭博などの悪習慣、価値観や生活上の食い違い、お金の使用、親への仕送り、子どものしつけ、仕事関係、友人関係、男女関係などに関する43項目のもめごとを作成した。各項目に関して、過去一年間に直面したかをチェックさせ、有りを1点、無しを0点に得点化した。これら43項目の内的整合性は、夫婦ともかなり高かった（両方とも $\alpha = .91$ ）。43項目の合計得点が高いほど、葛藤度が高いことを表す。

葛藤対処方略

周（2009）が作成した24項目の対処方策から成る“夫婦間葛藤対処方略尺度”を用いた。結婚生活のもめごとに対して交渉、話し合い、我慢、喧嘩、回避、親や友人への支援要請などの対処方策の使用頻度を尋ねた。各項目に関して、“頻繁に使った”から“まったく使わなかった”までの4段階で評定させ、使用頻度が高いほど高得点になるように、4～1点で得点化した。周（2009）によると、これら24項目の対処方策は因子分析により協調的話し合い、沈黙・冷戦、回避・我慢、非難・口喧嘩、暴力・不満表出、第三者調停依頼、および懐柔・哀願の7因子（7方略）に分類された。

本研究では確証的因子分析により、これら7因子をさらに対話、回避および攻撃の3つの二次因子にまとめた（夫の場合： $\chi^2_{(236)} = 547.34, p < .001, RMSEA = .064, CFI = .89, TLI = .88, SRMR = .085$ ；妻の場合： $\chi^2_{(236)} = 473.01, p < .001, RMSEA = .054, CFI = .93, TLI = .92, SRMR = .072$ ）。夫婦間葛藤対処方略尺度の項目内容を補助資料1に、確証的因子分析の結果を補助資料2に示している。

結婚生活の質

10項目の結婚生活の質の評価項目を用いた。それは伊（1991）や李（1999）などの尺度を参考にしながら作成し、周・深田（2014, 2015）でも同様な尺度を使用した。各項目に関して、“よくあてはまる”から“まったくあてはまらない”までの4段階で評定させた。この10項目の因子構造から、結婚の質は充実度と後悔度の2つの側面から成立することがすでに確認され（周・深田, 2014, 2015）、得点が高いほど充実度と後悔度が高いことを示している。

なお、各項目の欠損値は1%以下であり、欠損値には平均値を代入して処理した。

結 果

各変数における夫婦間の差異

夫あるいは妻が報告した葛藤度、一次因子レベルと二次因子レベルでの対処方略の使用度、結婚生活の質の平均得点を表1に示した。これらの変数における夫と妻の差を検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、夫よりも妻の方が、葛藤の程度は有意に高く、沈黙・冷戦方略、非難・口喧嘩方略（一次因子）や攻撃方略（二次因子）の使用度は有意に高かった。また、妻よりも

夫の方が、結婚生活の質は有意に高い（充実度が高い、後悔度が低い）ことが示された。

表1 各変数の平均値に関する夫婦間の差異

変数名	得点 範囲	夫		妻		対応のある <i>t</i> 検定
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	
葛藤度	0-43	20.27	10.08	21.90	10.16	-3.14 **
対処方略の因子						
協調的話し合い	1-4	2.75	0.73	2.80	0.74	-1.37
沈黙・冷戦	1-4	1.85	0.64	2.00	0.70	-4.11 ***
回避・我慢	1-4	2.34	0.72	2.30	0.74	0.89
非難・口喧嘩	1-4	1.77	0.55	2.01	0.64	-7.25 ***
暴力・不満表出	1-4	1.20	0.35	1.20	0.35	0.28
第三者調停依頼	1-4	1.15	0.34	1.15	0.34	-0.35
懐柔・哀願	1-4	1.83	0.65	1.79	0.70	0.94
対処方略の二次因子						
対話	1-4	2.29	0.53	2.30	0.58	-.33
回避	1-4	2.09	0.54	2.15	0.58	-1.73
攻撃	1-4	1.37	0.33	1.45	0.34	-4.60 ***
結婚の質						
充実度	7-28	23.44	3.63	22.53	4.22	4.68 ***
後悔度	7-28	10.97	3.68	11.61	4.23	-2.86 **

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

表2 夫あるいは妻における各変数間の相関関係および各変数の夫婦間での相関関係

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.	9.	10.	11.
夫											
1.葛藤度	--										
2.対話	-.03	--									
3.回避	.19 ***	.13 *	--								
4.攻撃	.45 ***	-.01	.36 ***	--							
5.充実度	-.41 ***	.32 ***	-.13 *	-.31 ***	--						
6.後悔度	.29 ***	-.32 ***	.12 *	.30 ***	-.56 ***	--					
妻											
7.葛藤度	.55 ***	-.16 **	.11 *	.38 ***	-.38 ***	.21 ***	--				
8.対話	.01	.55 ***	.11 *	.01	.19 ***	-.19 ***	-.17 **	--			
9.回避	.20 ***	-.11 *	.42 ***	.31 ***	-.16 **	.14 **	.27 ***	-.03	--		
10.攻撃	.31 ***	-.01	.29 ***	.54 ***	-.24 ***	.19 ***	.35 ***	.00	.32 ***	--	
11.充実度	-.32 ***	.26 ***	-.08	-.32 ***	.59 ***	-.46 ***	-.42 ***	.35 ***	-.23 ***	-.30 ***	--
12.後悔度	.23 ***	-.34 ***	.09	.32 ***	-.50 ***	.46 ***	.41 ***	-.38 ***	.28 ***	.32 ***	-.63 ***

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

変数間の関係

夫あるいは妻における葛藤度、二次因子レベルでの対処方略の使用度および結婚生活の質の6変数間の関係を、また、これら6変数に関する夫と妻の間の関係を検討するため、相関分析を行った(表2)。夫も妻も、葛藤度が高くなると、回避方略や攻撃方略の使用度が高くなり、結婚生活の質が低下すること、また、協調的話し合い方略の使用度が高くなると、結婚生活の質が上昇するが、

回避方略や攻撃方略の使用度が高くなると、結婚生活の質が低下することが示された。なお、妻の場合、葛藤度が高くなると、協調的話し合い方略の使用度が低くなっていた。

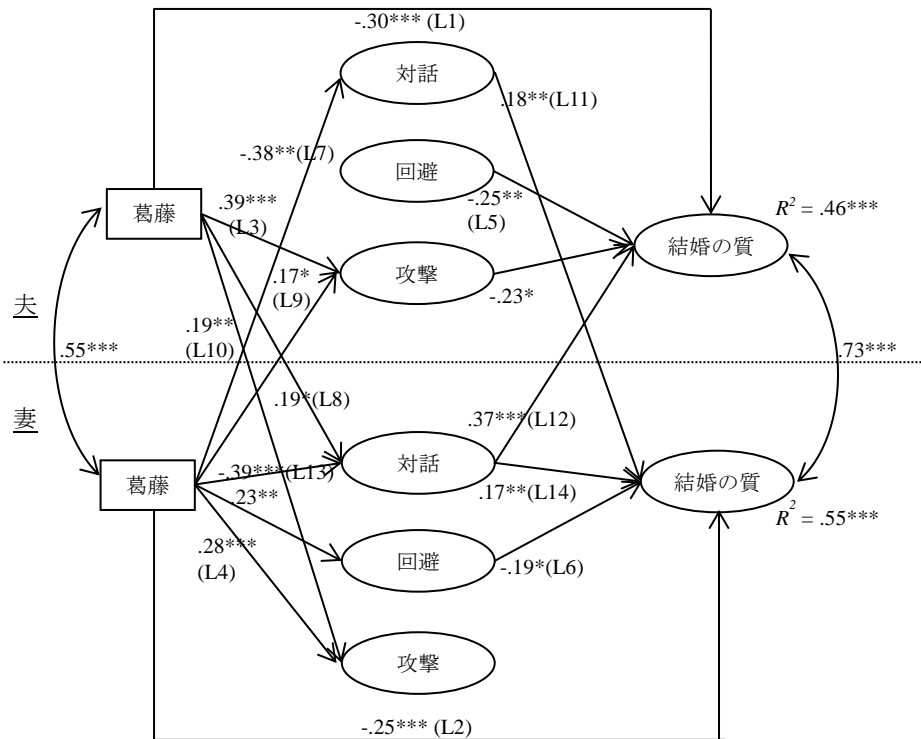
次に、夫と妻の間で同一変数間の関係を検討したところ、全ての変数において夫と妻との間に中程度からやや高い程度の有意な正の相関関係がみられ（.42-.59）、夫婦の一方が報告した葛藤の程度、対処方略の使用度または結婚生活の質が高ければ高いほど、もう一方の報告したそれらも高くなり、夫と妻の報告はかなり一致することが示された。

APIMにおける行為者効果とパートナー効果

夫婦カップルを分析単位にして、葛藤から対処方略の使用へ、対処方略の使用から結婚生活の質へという図1の夫婦間の相互的影響過程を検討するため、APIMに基づいて、共分散構造分析を行った。その際、夫の場合、7因子の対処方略をもって対話方略（協調的話し合いと懐柔・哀願の2方略から成る）、回避方略（沈黙・冷戦と回避・我慢の2方略から成る）および攻撃（非難・口喧嘩、暴力・不満表出、第三者調停依頼の3方略から成る）の3つの潜在変数を構成した。また夫の結婚生活の充実度と後悔度を観測変数の指標とし、結婚の質という潜在変数を構成した。妻の場合も夫の場合と同様に上記の4つの潜在変数を構成した。

共分散構造分析の結果、 χ^2/df は約 2.91 ($\chi^2 = 387.02, df = 133, p < .001$)、*RMSEA* は.075、*CFI* は.877であり、APIMの適合性は容認範囲にあると示された。APIMにおいて有意な箇所を図2にまとめた。図2から、以下の行為者効果の存在が明らかとなった。夫も妻も自分自身の報告した葛藤度が高ければ自分自身の結婚の質が悪くなる（-.30、-.25, $p < .001$ ）ことが示された。そして、夫の場合、葛藤度が高ければ、攻撃方略の使用度が高くなる（.39, $p < .001$ ）こと、また、回避方略や攻撃方略の使用度が高ければ、結婚の質が低下する（-.25、-.23, $p < .05$ ）ことが示された。妻の場合、葛藤度が高ければ、回避方略や攻撃方略の使用度が高くなり（.23、.28, $p < .01$ ）、対話方略の使用度が低くなる（-.39, $p < .001$ ）こと、また、回避方略の使用度が高ければ、あるいは対話方略の使用度が低くければ、結婚の質が低下する（.17、-.19, $p < .05$ ）ことが示された。

次に図2から、以下のパートナー効果の存在が明らかとなった。配偶者の報告した葛藤度は夫や妻の結婚の質と直接的な影響関係がなかったが、夫の葛藤度が高ければ、妻の対話や攻撃方略の使用度が高くなる（.19、.19, $p < .05$ ）こと、妻の葛藤度が高ければ、夫の対話方略の使用度が低くなり、攻撃方略の使用度が高くなる（-.38、.17, $p < .05$ ）ことが示された。そして、配偶者の対話方略の使用度が高ければ、夫と妻の結婚の質が向上する（.18、.37, $p < .01$ ）ことが示された。



注：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

図2 葛藤対処方略についての行為者 - パートナー相互依存モデルに関する主な結果

APIM 比較モデルの検討

続いて APIM 比較モデルを検討するため、制限モデル (constrained model) の分析を以下の手順により行った。まず“葛藤→結婚の質”、“葛藤→対処方略”、“対処方略→結婚の質”における夫婦両方の行為者効果、夫婦両方のパートナー効果、あるいは行為者 - パートナー比較効果 (夫あるいは妻に対する自身の行為者効果と配偶者のパートナー効果) に焦点を当て、両者のパスがともに有意である箇所 (例：“葛藤→結婚の質”における夫と妻の行為者効果、L1 と L2) を等しくさせるように設定した。そして、元モデル (非制限モデル) と制限モデルにおけるパラメータ間の差 (χ^2 値の差、 $\Delta \chi^2$) の検定を行った。その際、パラメータ間の差が統計的に有意になると、両者のパスが等しくないことを表す。

元モデルと制限モデルとの比較結果を表3にまとめた。行為者効果を比較したところ、“葛藤→結婚の質”、“葛藤→攻撃方略”あるいは“回避方略→結婚の質”の3つの制限モデルのいずれも元モデルとの差は有意でなく、夫婦両方の行為者効果が類似していることが示された。パートナー効果を比較したところ、配偶者の葛藤度の対話方略への影響 (“葛藤→対話方略”) は、制限モデルと元モデルの間に有意差が見られ ($\Delta \chi^2(1) = 10.04, p < .01$)、妻がパートナーである効果は夫がパート

ナーである効果よりも有意に大きいことが示された。その上、そのパスの影響は正反対となり、妻の葛藤度が高ければ、夫の対話方略の使用度が低くなるが、夫の葛藤度が高ければ、妻の対話方略の使用度が逆に高くなっていった。また、パートナー効果の中の“葛藤→攻撃方略”や“対話方略→結婚の質”の2つの制限モデルは元モデルと有意差がなく、夫婦両方のパートナー効果が類似していることが示された。

行為者-パートナー効果を比較したところ、夫と妻の葛藤度が妻の対話方略に及ぼす影響（“夫と妻の葛藤→妻の対話方略”）および夫と妻の葛藤度が夫の攻撃方略に及ぼす影響（“夫と妻の葛藤→夫の攻撃方略”）は、制限モデルと元モデルの間に有意差が見られた（ $\Delta \chi^2(1) = 4.08, 4.00, ps < .05$ ）。前者の影響の場合、妻の対話方略に及ぼす影響は、妻の葛藤度の方が夫の葛藤度よりも大きく、妻自身からの行為者効果の方が夫からのパートナー効果よりも大きいことが示された。その上、この妻自身からの行為者効果（負の影響）と夫からのパートナー効果（正の影響）の方向は正反対であり、社会的比較モデルがある程度実証されたと言えよう。そして、後者の影響の場合、夫の攻撃方略に及ぼす影響は、夫の葛藤度の方が妻の葛藤度よりも大きく、夫からの行為者効果の方が妻からのパートナー効果よりも大きいことが示された。また、夫と妻の葛藤が妻の攻撃方略に及ぼす影響（“葛藤→妻の攻撃方略”）や夫と妻の対話方略が妻の結婚の質に及ぼす影響（“対話方略→妻の結婚の質”）に関しては、制限モデルと元モデルとの間に有意差がなく、行為者効果とパートナー効果が類似していることが判明し、カップル志向モデルを支持する証拠が得られた。

表3 元モデル（非制限モデル）と制限モデルにおける比較の結果

		パス係数	χ^2	df	比較	$\Delta \chi^2$	判断
1.未制限の元モデル			387.02	133			
<u>行為者効果の比較</u>							
2.葛藤→結婚の質	L1=L2	-.30 & -.25	387.04	134	2 vs. 1	.02	
3.葛藤→攻撃方略	L3=L4	.39 & .28	387.44	134	3 vs. 1	.42	
4.回避方略→結婚の質	L5=L6	-.25 & -.19	387.34	134	4 vs. 1	.32	
<u>パートナー効果の比較</u>							
5.葛藤→対話方略	L7=L8	-.38 & .19	397.06	134	5 vs. 1	10.04 **	妻>夫
6.葛藤→攻撃方略	L9=L10	.17 & .19	387.17	134	6 vs. 1	.15	
7.対話方略→結婚の質	L11=L12	.37 & .18	387.02	134	7 vs. 1	.00	
<u>行為者-パートナー効果の比較</u>							
8.葛藤→妻対話方略	L13=L8	-.39 & .19	391.10	134	8 vs. 1	4.08 *	妻>夫
9.葛藤→夫攻撃方略	L3=L9	.39 & .17	391.02	134	9 vs. 1	4.00 *	夫>妻
10.葛藤→妻攻撃方略	L4=L10	.28 & .19	389.93	134	10 vs. 1	2.91	
11.対話方略→妻結婚の質	L14=L11	.17 & .18	388.69	134	11 vs. 1	1.67	

注： $\Delta \chi^2$ は $\Delta \chi^2(1)$ の略記。** $p < .01$, * $p < .05$

葛藤対処方略の媒介効果

最後に葛藤対処方略の媒介効果（“葛藤→葛藤対処方略→結婚の質”）を検討するため、“葛藤から対処方略へ”と“対処方略から結婚の質へ”の両パスともに有意であった箇所、Sobel（1982）のSobel testを用い、間接効果（“葛藤→対処方略”のパス係数と“対処方略→結婚の質”のパス係数の積）の有意性検定を行った（表4）。なお、ここでの対処方略の媒介効果とは、対処方略が葛藤と

結婚の質の間の関係をどの程度媒介するかを意味し、間接効果とは、対処方略を媒介して葛藤が結婚の質に及ぼす影響度を意味するので、対処方略の媒介効果と葛藤の間接効果は本質的に同じことを意味する。

その結果、行為者効果の場合、夫の攻撃方略は、夫の葛藤度と夫の結婚の質の間の有意な媒介効果を示し ($\beta = .027, p < .05$)、妻の対話方略は、妻の葛藤度と妻の結婚の質の間の有意な媒介効果を示した ($\beta = .022, p < .05$)。パートナー効果の場合、妻の対話方略は、夫の葛藤度と夫の結婚の質の間の有意な媒介効果を示し ($\beta = .020, p < .05$)、夫の対話方略は、妻の葛藤度と妻の結婚の質の間の有意な媒介効果を示した ($\beta = .022, p < .05$)。行為者 - パートナー効果の場合、妻の対話方略は、妻の葛藤度と夫の結婚の質の間の有意な媒介効果を示し ($\beta = .041, p < .001$)、妻から妻自身への行為者効果 (“妻の葛藤→妻の対話方略”) は、妻から夫へのパートナー効果 (“妻の対話方略→夫の結婚の質”) へ転換されることが示された。

表4 間接効果のテスト結果

パス			間接効果	Sobel test
葛藤 _H	→ 攻撃 _H	→ 結婚の質 _H	A → A	.027 -2.255 *
葛藤 _W	→ 対話 _W	→ 結婚の質 _W	A → A	.022 -2.475 *
葛藤 _W	→ 回避 _W	→ 結婚の質 _W	A → A	.015 -1.833
葛藤 _H	→ 対話 _W	→ 結婚の質 _H	P → P	.020 2.079 *
葛藤 _W	→ 対話 _H	→ 結婚の質 _W	P → P	.022 -2.142 *
葛藤 _W	→ 対話 _W	→ 結婚の質 _H	A → P	.041 -3.378 ***
葛藤 _H	→ 対話 _W	→ 結婚の質 _W	P → A	.011 1.805
葛藤 _W	→ 攻撃 _H	→ 結婚の質 _H	P → A	.014 1.863

注：Aは行為者効果、Pはパートナー効果、Hは夫、Wは妻。

*** $p < .001$, * $p < .05$

考 察

夫婦が互いに影響し合うという観点から、本研究は APIM の分析手法を用い、夫あるいは妻の個人内の影響過程および夫と妻の二者間の相互影響過程を考慮しつつ、夫と妻の経験した葛藤、用いた葛藤対処方略および報告した結婚生活の質の間の関係を検討した。分析の結果から、夫婦間で使用される7因子の葛藤対処方略は“対話”、“回避”と“攻撃”の3つの二次因子に統合され、夫婦間葛藤、攻撃方略、および結婚の質は夫婦間で異なることが分かった。そして APIM の分析結果から、葛藤対処方略が結婚の質に及ぼす直接影響と、葛藤対処方略が葛藤と結婚の質の間の関係に及ぼす媒介的影響は、使用される二次因子レベルの葛藤対処方略の種類によって異なることが明らかとなった。対話方略は、夫あるいは妻の個人内の影響過程および夫と妻の夫婦間の影響過程において直接的影響力あるいは媒介的影響力を持ち、行為者効果もパートナー効果も示された。そして、回避方略や攻撃方略は、夫あるいは妻の個人内の影響過程でのみ直接的影響力あるいは媒介的影響力を持ち、行為者効果のみが示された。その上、APIM におけるカップル志向モデルや社会的比較モデルを支持する結果も見出された。

まず、一次因子のレベルで葛藤対処方略の使用度をみると、夫婦とも協調的話し合い方略の使用度が最も高く（中点の2.5以上）、回避・我慢方略の使用度が次に高く、暴力・不満表出方略と第三者調停依頼方略の使用度が最も低かった。夫婦関係は長期的な協力関係の典型であり、関係を維持するため、互いに協調し合い、ポジティブなコミュニケーションを採るように努力を払い、暴力・不満表出のような社会的に受け入れられにくく、また長期的な効果の期待できない方略を使用しないように個人が気を遣うと考えられる（Burlison, Wilson, Waltman, Goering, Ely & Whaley, 1988; 周, 2003; 周・深田, 2011）。また、面子保護のため、あるいは夫婦間のもめごとを他者に知られたくないため、第三者調停依頼方略をあまり使用しないと推測される。

各変数における夫婦間の差異をみると、夫に比べ、妻の方が葛藤度が高く、沈黙・冷戦や非難・口喧嘩という2つの対処方略（一次因子）および攻撃方略（二次因子）の使用度が高いこと、逆に妻に比べ、夫の方が結婚の質を高く（充実度を高く、後悔度を低く）評価していることが示された。先行研究では、男性よりも女性の方が喧嘩や自己を責める対処方略を多く使用し（Lee, 1995）、夫よりも妻の方が冷戦、拒絶、怒りや対立のような対処方略を多く使用する（Bouchard, Sabourin, Lussier, Wright & Richer, 1998）ことが指摘されており、本研究も類似した結果が見出された。また、結婚生活に対する評価が妻に比べ夫の方で高かったことは、過去の研究（蕭・黄, 2010; 周, 2009; 周・深田, 2011; Vaillant & Vaillant, 1993 など）と一致している。

次に、葛藤度、葛藤対処方略や結婚の質に関して、夫と妻の間に中程度以上の相関（.42～.59）があり、夫と妻の報告が類似していることは、夫婦間の方略使用について夫と妻の間に何らかの対応性・相互性があると指摘した先行研究（周・深田, 2011; 周・謝, 2009; 熊谷, 1979 など）の結果と一致する。また、夫と妻に関する結果の特徴を総合的・大局的に判断すると、葛藤度の高さは回避方略や攻撃方略の使用度の高さに関連し、葛藤度、回避方略や攻撃方略の使用度は結婚の質の低下と関連し、対話方略の使用度は結婚の質の向上と関連することが見出され、夫婦関係に対し葛藤、および回避や攻撃などのネガティブな対処方略は悪影響を、対話といったポジティブな方略は好ましい影響をもたらすことが判明した。こうした結果は仮説1、仮説2と仮説3を支持するもので、過去の研究結果とかなり一致している（Bernard, 1982; Vaillant & Vaillant, 1993; Verhofstadt, Buysse, Ickes, de Clercq & Peene, 2005）。

ところで、二次因子分析により、夫婦間の葛藤対処方略は“対話”、“回避”と“攻撃”の3つの二次因子にまとまった。対話方略は、協調的話し合い方略と懐柔・哀願方略の2方略を含むので、積極的でポジティブな対処方略と見なされうる。その一方、回避方略は、沈黙・冷戦方略と回避・我慢方略の2方略を含むので、消極的でネガティブな対処方略、また、攻撃方略は、非難・口喧嘩方略、暴力・不満表出方略、第三者調停依頼方略の3方略を含むので、積極的でネガティブな対処方略と見なされうる。これら3つの二次因子を使用した共分散構造分析によるAPIMの結果からは、興味深い行為者効果とパートナー効果が認められた。これらの効果を表5にまとめた。

夫の場合も妻の場合も、自分自身の報告した葛藤度は自分自身の結婚の質に対して負の影響があり、仮説1-1（行為者効果：自分の葛藤→自分の結婚の質）が支持された。しかし、夫婦のどちらの場合も、配偶者の報告した葛藤度は自分自身の結婚の質との関係がなく、仮説1-2（パートナー

効果：配偶者の葛藤→自分の結婚の質）は支持されなかった。

表5 APIMによる行為者効果とパートナー効果のまとめ

APIM 効果	行為者効果		パートナー効果		両効果	
比較モデル	行為者志向		パートナー志向		カップル志向／社会的比較	
影響関係	夫→夫	妻→妻	妻→夫	夫→妻	夫妻→夫	妻夫→妻
葛藤→結婚の質	-	-				
葛藤→対話		(-)**	-	(+)**		-+
葛藤→回避		+			×	
葛藤→攻撃	(+)*	(+)*	(+)*	(+)*	++	++
対話→結婚の質		(+)*	+	(+)*		++
回避→結婚の質	-	-				
攻撃→結婚の質	-					×

注：-は負の効果、+は正の効果。()*と()**のつかない-と+は行為者効果のみ（行為者志向モデル）、あるいはパートナー効果のみ（パートナー志向モデル）。()*と++は同方向の行為者効果とパートナー効果（カップル志向モデル）。()**と-+は逆方向の行為者効果とパートナー効果（社会的比較モデル）。×は無効果。

妻が用いた対話方略は妻自身の結婚の質に対し促進効果をもつが、夫の場合はそういった効果がなく、仮説 2-1（行為者効果：自分の対話方略→自分結婚の質）は部分的に支持された。夫の場合も妻の場合も、配偶者の報告した対話方略は自分自身の結婚の質に対して促進効果をもち、仮説 2-2（パートナー効果：配偶者の対話方略→自分の結婚の質）が支持された。

夫の場合も妻の場合も、自分自身が用いた回避方略は自分自身の結婚の質に悪影響を及ぼし、また、夫が用いた攻撃方略は夫自身の結婚の質へ悪影響を及ぼしたが、妻が用いた攻撃方略はそうした影響をもたず、仮説 3-1（行為者効果：自分の回避や喧嘩→自分の結婚の質）はかなりの程度支持された。しかし、夫と妻の双方にとって、配偶者の用いた回避方略や攻撃方略は自分自身の結婚の質との関係がなく、仮説 3-2（パートナー効果：配偶者の回避や喧嘩→自分の結婚の質）は支持されなかった。

これらの結果から、夫婦間葛藤が回避方略や攻撃方略といったネガティブな対処方略に及ぼす影響、あるいはネガティブな対処方略が結婚の質への影響は、大抵の場合に“行為者効果”が見られたが、“パートナー効果”は全く見られず、夫婦関係に対する葛藤度やネガティブな対処方略の悪影響は夫と妻の個人内にとどまることが判明した。これに対して、対話方略というポジティブな対処方略が結婚の質に及ぼす影響は、“行為者効果”も、“パートナー効果”も認められ、夫婦関係に対するポジティブな対処方略の好ましい影響は、夫と妻の個人内にとどまらず、夫婦内で相互に影響し合うことが判明した。El-Sheikh et al. (2015) と Papp & Witt (2010) の 2 研究は、ポジティブやネガティブな対処方略が夫と妻個人の健康や関係満足度に対して行為者効果をもち、その上、妻の対処方略が夫の個人の健康や関係満足度に対してパートナー効果をもつこと、また、Landis et al. (2013) は、夫婦の支援的な対処方式が関係満足度に及ぼす影響には、行為者効果もパートナー効果もあることを報告していた。本研究の結果はこれらの先行研究の結果とかなり一致している。

本研究は、部分的にはあるが“カップル志向”と“社会的比較”の2モデルを支持する結果を見出した。カップル志向モデルは、“葛藤→攻撃方略”と“対話方略→妻の結婚の質”の2つのパスで検出され、夫婦が用いた攻撃方略は自分と配偶者の両方の葛藤度によって影響され、妻の結婚の質は自分と配偶者の両方が用いた対話方略によって影響されていた。社会的比較モデルは、“葛藤→妻の対話方略”のパスのみで検出され、妻の用いた対話方略は自分と配偶者の両方の葛藤度によって影響されるが、行為者効果とパートナー効果の符号は逆となり、妻の葛藤度が高ければ、妻自身の対話方略の使用度が低くなるが（行為者効果）、夫の葛藤度が高ければ、妻の対話方略の使用度が逆に高くなっている（パートナー効果）。

この社会的比較モデルの結果は非常に興味深い現象を表している。一般的にいえば（表2の相関分析の結果からも）、個人は大きい葛藤に直面したとき、理性的・協調的・柔軟な方略をなかなか採り難く、逃避的・批判的・高圧的な方略を採用する傾向が強いと推測されうる。また、現代の台湾では夫婦における伝統的な性役割観はかなり弱まり、女性は男性よりも平等主義的態度をもつ傾向が強くなったことが指摘されている（張・李, 2007）。しかし、本研究の結果はそれと矛盾するもので、妻は自分自身が高葛藤状態にある場合にはネガティブな対処方略を使用するが、夫が高葛藤状態にある場合には、話し合ったり怀柔したりする協調的で柔軟なコミュニケーションを採ろうとした。伝統的性役割観からいえば、男性は積極的で、決断力があり、家族を養う責任をもつが、女性は優しく、融和的で、よく気がつき、家族を世話する責任を負っている（佐藤・渡邊, 2004）。上記の社会的比較モデルの結果は、現在でも家庭内の世話役としての役割を担う台湾の妻の姿が窺われた。

最後に、行為者効果とパートナー効果を考慮すると、本研究の結果から、二次因子のレベルでの3つの対処方略がもつ媒介効果の様相はかなり異なることが分かる。対話方略は、葛藤と結婚の質の間の有意な媒介効果を示し、仮説4-1が支持された。そして、対処方略の有意な媒介的機能には、行為者効果から行為者効果へ（“妻の葛藤→妻の対話方略→妻の結婚の質”）、パートナー効果からパートナー効果へ（“妻の葛藤→夫の対話方略→妻の結婚の質”、“夫の葛藤→妻の対話方略→夫の結婚の質”）、ないし行為者効果からパートナー効果へ（“妻の葛藤→妻の対話方略→夫の結婚の質”）といった効果の多様な引継ぎと転換の形態が出現している。その一方で、攻撃方略は、葛藤と結婚の質の間に有意な媒介効果を示し、仮説4-2が支持された。ただし、その媒介的機能は、行為者効果から行為者効果へ（“夫の葛藤→夫の攻撃方略→夫の結婚の質”）といった効果の引継ぎのみであり、夫あるいは妻の個人内のレベルに限定される。なお、回避方略の有意な媒介効果は認められなかった。

過去の研究はポジティブな対処方略が夫婦関係に対する促進効果をすでに実証しているが、本研究はさらに、夫婦間のポジティブな対処方略の直接効果、媒介効果、行為者効果、パートナー効果、および行為者効果からパートナー効果への転換を発見し、ポジティブな葛藤対処方略が夫個人、妻個人、夫婦両方のすべてに対して良好で望ましい機能をもつことを解明した。また、ネガティブな葛藤対処方略が夫婦関係を悪化させるという先行研究と類似した結果も見出したが、幸いにその影響範囲はそれほど広くなく、夫あるいは妻の個人内の影響にとどまり、配偶者に対してまで影響を

及ぼすことはないことを明らかにした。

このように、本研究の仮説はほぼ支持された。ポジティブな性質をもつ対話方略は、夫あるいは妻の個人内にとどまらず、夫婦間で相互的に影響し合う直接的および媒介的機能を持ち、行為者効果・パートナー効果・行為者-パートナー転換効果の存在が解明された。これに対し、ネガティブな性質をもつ回避方略や攻撃方略は、夫あるいは妻の個人内でのみ直接的あるいは媒介的機能をもつが、行為者効果しか存在しないことが解明された。さらに、APIMにおけるカップル志向モデルや社会的比較モデルの予測する結果を確認することに成功し、Kenny et al. (2006) が示唆した4種類の比較モデルの妥当性を実証することに成功した。今後、伝統的性役割や男女平等観を測定し、夫婦間の葛藤、対処方略や結婚の質に及ぼすそうした文化的要因の影響を検討する必要があるだろう。また、長期的・縦断的なデータを用いて本研究の結果の妥当性を検討することも将来の課題の一つになる。なお、家族とは夫婦だけでなく、老親や子どもなどとの関係をも同時に考慮することによって、家庭内の家族成員全員を包括する家族全体のコミュニケーションの特徴を把握する、より複雑で大規模な研究が期待される。

(注1) 本研究の調査資料は台湾科技部の補助計画の一部であった(研究計画名: “夫妻間之權力與互動歷程探討”, MOST 103-2410-H-001-057-SS2)。

引用文献

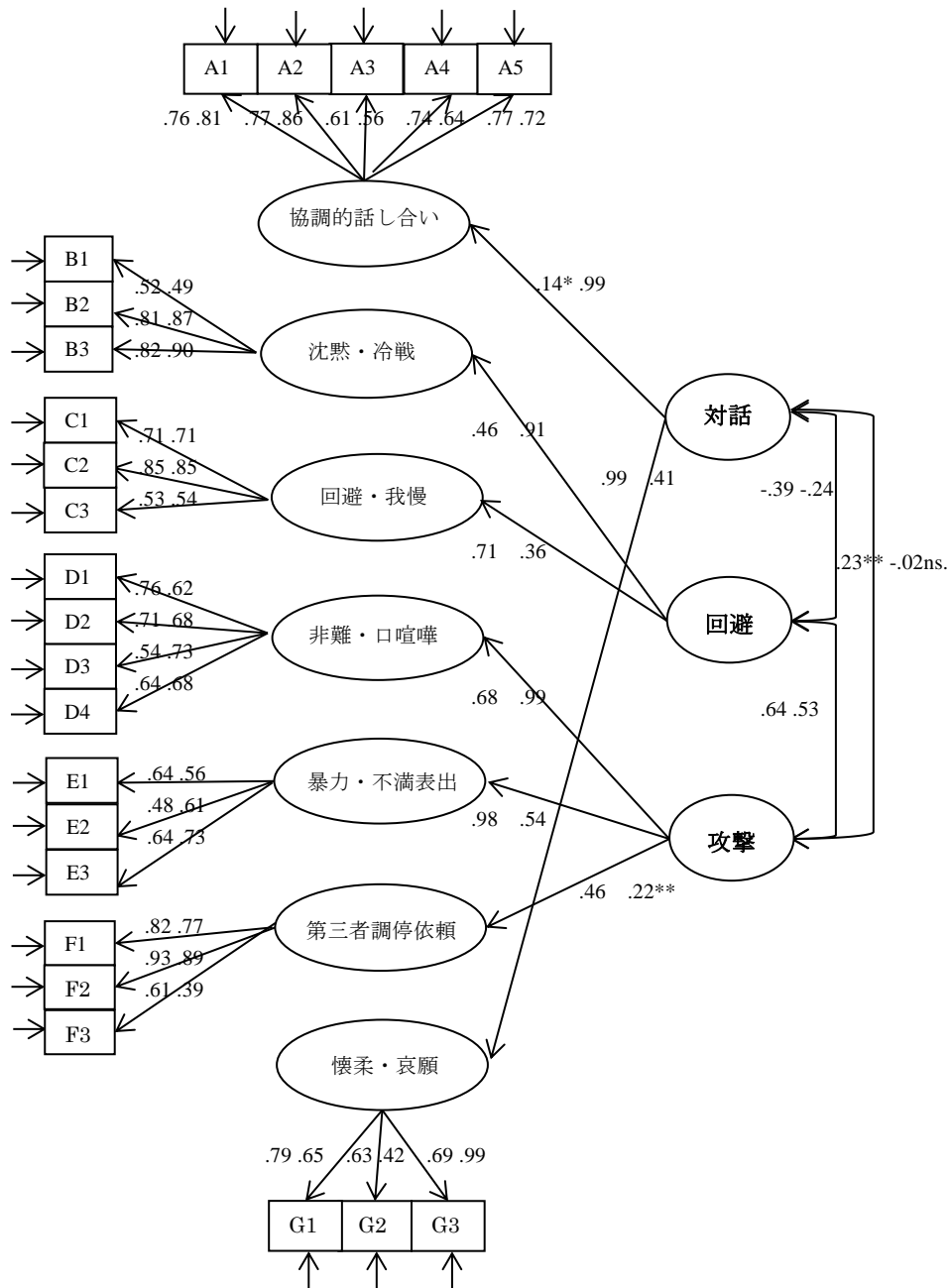
- Argyle, M., & Furnham, A. (1983). Sources of satisfaction and conflict in long-term relationships. *Journal of Marriage and the Family*, **45**, 481-493.
- Barry, R. A., & Lawrence, E. (2013). “Don’t stand so close to me”: An attachment perspective of disengagement and avoidance in marriage. *Journal of Family Psychology*, **27**(3), 484-494.
- Bernard, J. (1982). *The future of marriage*. New York: Bantam Books.
- Bouchard, G., Sabourin, S., Lussier, Y., Wright, J., & Richer, C. (1998). Predictive validity of coping strategies on marital satisfaction: Cross-sectional and longitudinal evidence. *Journal of Family Psychology*, **12**(1), 112-131.
- Burleson, B. R., Wilson, S. R., Waltman, M. S., Goering, E. M., Ely, T. K., & Whaley, B. B. (1988). Item desirability effects in compliance gaining research: Seven studies documenting artifacts in the strategy selection procedure. *Human Communication Research*, **14**, 429-486.
- 張 晉芬・李 奕慧 (2007). 「女人的家事」、「男人的家事」: 家事分工性別化的持續與解釋 人文及社會科學集刊, **19**(2), 203-229.
- 張 思嘉 (2001). 婚姻早期的適應過程--新婚夫妻之質性研究 本土心理學研究, **16**, 91-133.
- Dadds, M. R., Erin, A., Cynthia, T., G. John. B., & Bernice, L. (1999). Family Conflict and Child Adjustment: Evidence for a Cognitive-Contextual Model of Intergenerational Transmission. *Journal of Family Psychology*, **13**(2), 194-208.

- El-Sheikh, M., Kelly, R. J., Koss, K. J., & Rauer, A. J. (2015). Longitudinal relations between constructive and destructive conflict and couples' sleep. *Journal of Family Psychology*, **29**(3), 349-359.
- Falbo, T., & Peplau, L. A. (1980). Power strategies in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **38**, 618-628.
- Givertz, M., Segrin, C., & Woszidlo, A. (2016). Direct and indirect effects of commitment on interdependence and satisfaction in married couples. *Journal of Family Psychology*, **30**(2), 214-220.
- Gottman, J. M. (1979). *Marital interaction: Experimental investigations*. NY: Academic Press.
- 飛田 操 (1997). 家族関係と葛藤 大淵憲一 (編) 紛争解決の社会心理学 ナカニシヤ出版 pp.186-206.
- Howard, J. A., Blumstein, P., & Schwartz, P. (1986). Sex, power, and influence tactics in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 102-109.
- 蕭 英玲・黄 芳銘 (2010). 婚姻滿意度與憂鬱傾向：貫時性對偶分析 中華心理學刊, **52**(4), 337-396.
- 黄 宗堅・葉 光輝・謝 雨生 (2004). 夫妻關係中權力與情感的運作模式：以衝突因應策略為例 本土心理學研究, **21**, 3-48.
- 周 玉慧 (2001). 夫妻間社會支持與其獲取策略之運用 行政院國家科學委員會專題研究計畫, NSC 89-2413-H-001-006.
- 周 玉慧 (2003). 人を見てモノをいうか？——サポート源に応じたサポート獲得方略の使用 心理学研究, **73**, 494-501.
- 周 玉慧 (2009). 夫妻間衝突因應方略類型及其影響 中華心理學刊, **51**(1), 81-99.
- 周 玉慧・深田博己 (2011). 夫婦間サポート獲得方略の使用類型がサポート受け取りと結婚の質に及ぼす影響 心理学研究, **82** (3), 231-239.
- 周 玉慧・深田 博己 (2014). 結婚の質に及ぼす夫婦間のサポートの授受とサポート獲得方略の授受の関係：二者関係における相互作用過程の観点から 対人コミュニケーション研究, **2**, 1-18.
- 周 玉慧・深田 博己 (2015). 夫婦関係に及ぼす欺瞞動機と欺瞞方略の影響 対人コミュニケーション研究, **3**, 1-18.
- 周 玉慧・謝 雨生(2009). 夫妻間支持授受及其影響 中華心理學刊, **51**(2), 215-234.
- 川島 亜紀子 (2013). 『Yahoo!知恵袋』に見る夫婦間葛藤解決方略 千葉大学教育学部研究紀要, **61**, 185-191.
- Kenny, D. A., Kashy, D. A., & Cook, W. L. (2006). *Dyadic data analysis*. New York: Guilford Press.
- 熊谷 文枝 (1979). 夫婦の葛藤解決表出過程——日・印・米の比較調査—— 社会学評論, **30**, 36-50.
- Landis, M., Peter-Wight, M., Martin, M., & Bodenmann, G. (2013). Dyadic coping and marital satisfaction of older spouses in long-term marriage. *GeroPsych: The Journal of Gerontopsychology and Geriatric Psychiatry*, **26**, 39-47.
- Lee, L. J. (1995). Age and sex differences in marital coping behaviors. *The Journal of National Chengchi University*, **70**, 117-134.
- 李 良哲 (1999). 維繫婚姻關係重要因素的成人期差異初探 教育與心理研究, **22**, 145-160.

- Lee-Baggley, D., Preece, M., & DeLongis, A. (2005). Coping with interpersonal stress: Role of big five traits. *Journal of Personality*, **73**, 1141-1180.
- 林 安文・深田 博己・児玉 真樹子・周 玉慧 (2003). 結婚満足度に及ぼす親密度と葛藤解決方略の影響——台湾における夫婦の場合 広島大学心理学研究, **3**, 87-96.
- 松永 正樹 (2012). これからの“統計”の話をしよう—日本のコミュニケーション研究者のための最先端手法案内— ヒューマン・コミュニケーション研究 (*Human communication studies*), **40**, 55-85.
- Papp, L. M., & Witt, N. L. (2010). Romantic partners' individual coping strategies and dyadic coping: Implications for relationship functioning. *Journal of Family Psychology*, **24**(5), 551-559.
- Proulx, C. M., Helms, H. M., & Buehler, C. (2007). Marital quality and personal well-being: A meta-analysis. *Journal of Marriage and Family*, **69**, 576-593.
- Pruitt, D. G., & Carnevale, P. J. (1993). *Negotiation in social conflict*. Buckingham: Open University Press.
- Rubin, R. B., & Graham, E. E. (1994). Measures of interpersonal communication. In R. B. Rubin, P. Palmgreen, H. E. Sypher, & M. J. Beatty (Eds.), *Communication research measures: A sourcebook*. The Guilford Communication Series. New York: Guilford Press. pp. 21-37.
- 佐藤 容子・渡邊 映子 (2004). 既婚女性の性役割と夫婦関係に関する研究 東京成徳大学臨床心理学研究, **4**, 28-37.
- 清水 裕士 (2014). 個人と集団のマルチレベル分析 ナカニシヤ出版.
- Sobel, M. E. (1982). Asymptotic intervals for indirect effects in structural equations models. In S. Leinhardt (Ed.), *Sociological methodology 1982*. San Francisco: Jossey-Bass. pp.290-312.
- Vaillant, C. O., & Vaillant, G. E. (1993). Is the U-curve of marital satisfaction an illusion? A 40 year study of marriage. *Journal of Marriage and the Family*, **55**, 230-239.
- Verhofstadt, L. L., Buysse, A., Ickes, W., de Clercq, A., & Peene, O. J. (2005). Conflict and support interactions in marriage: An analysis of couples' interactive behavior and on-line cognition. *Personal Relationship*, **12**, 23-42.
- 楊 國樞 (1996). 父子軸家庭與夫妻軸家庭的運作特徵與歷程 行政院國家科學委員會專題計畫, NSC 85-2417-H-002-028-G6.
- 伊 慶春 (1991). 台北地區婚姻調適的一些初步研究發現 國家科學委員會研究彙刊:人文及社會科學, **1**, 151-173.
- 兪 幃蘭 (2014). 夫婦の葛藤解決方略と結婚満足度に関する日韓比較研究 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **63** (1), 159-175.

補助資料1 夫婦間葛藤対処方略尺度の項目、各項目の平均値および各因子の内的整合性

	夫		妻	
	M	SD	M	SD
<u>因子Ⅰ. 協調的話し合い</u>				
A1.十分に話し合う	2.80	.98	2.98	.96
A2.互いに受け入れられるよう協調し合う	2.79	.97	2.84	.97
A3.相手を褒めてから、話し合う	2.20	.94	2.07	.91
A4.相手の意見を尊重して、相手の考えを受容する	2.79	.95	2.73	.89
A5.直接にコミュニケーションをとる	2.97	.96	3.05	.95
α係数	.89		.84	
<u>因子Ⅱ. 沈黙・冷戦</u>				
B1.真相を言わず、相手をだます	1.57	.70	1.46	.67
B2.黙って不満を表す	2.18	.88	2.31	.94
B3.冷戦状態になる	1.99	.83	2.13	.89
α係数	.70		.75	
<u>因子Ⅲ. 回避・我慢</u>				
C1.機嫌を損なわないように喧嘩を避ける	2.44	.96	2.37	.92
C2.互いに我慢したり譲ったりする	2.61	.93	2.48	.88
C3.和を守るため、問題を回避する	1.90	.82	1.83	.78
α係数	.65		.64	
<u>因子Ⅳ. 非難・口喧嘩</u>				
D1.相手の粗忽や誤りを責める	1.69	.69	1.82	.75
D2.口げんかをする	1.79	.67	1.94	.71
D3.泣いたり、怒ったりして不平不満を表す	1.37	.56	1.79	.77
D4.口うるさく文句言ったりする	1.79	.68	2.08	.80
α係数	.75		.79	
<u>因子Ⅴ. 暴力・不満表出</u>				
E1.たたいたり、殴ったりする	1.09	.32	1.09	.34
E2.自分を傷つけて不満を表す	1.11	.36	1.14	.45
E3.身体動作(例.机を叩く、物事を投げる)で不満を表す	1.39	.61	1.40	.63
α係数	.62		.59	
<u>因子Ⅵ. 第三者調停依頼</u>				
F1.妻の親類に頼んで調停してもらおう	1.14	.41	1.14	.42
F2.夫の親類に頼んで調停してもらおう	1.11	.35	1.13	.41
F3.友人や同僚に頼んで調停してもらおう	1.11	.36	1.11	.33
α係数	.74		.62	
<u>因子Ⅶ. 懐柔・哀願</u>				
G1.だだをこねて問題から注意をそらせる	1.60	.70	1.90	.81
G2.花やプレゼントを贈って問題をなかつたことにする	1.47	.63	1.30	.52
G3.手を繋いだり抱きしめたりして問題を忘れさせようとする	2.02	.88	2.02	.94
α係数	.73		.72	



注：図内の数値は標準化された係数。前は夫の、後は妻の数値。
 * $p < .05$, ** $p < .01$, アスタリスクのつかない数値は $p < .001$

補助資料 2 夫婦の葛藤対処方略における確証的因子分析の結果

Effects of conflict-coping strategies on marital quality: Using the Actor-Partner Interdependence Model

Yuh-Huey JOU (Academia Sinica, Taiwan)

and

Hiromi FUKADA (Hiroshima Bunkyo Women's University)

From the viewpoint of individual and dyadic interaction processes among married couples, this paper uses the Actor-Partner Interdependence Model (APIM) to examine the direct and indirect effect of conflict-coping strategies on the relationship between marital conflict and quality. Three hundred and forty two Taiwanese married couples filled out a questionnaire which included conflict events; conflict-coping strategies and two marital qualities: satisfaction and regret. The seven conflict-coping strategies (cooperative talk, silence/cold war, avoidance/tolerance, blame/argument, violence/expression of complaint, request of intercession to others, and placation/cry) could be combined as “dialogic”, “evasive” and “aggressive” strategies by second order factor analysis. The results showed that wives reported higher level of conflict, used more aggressive strategy, and reported worse marital quality. APIM's results indicated that the dialogic strategy had direct and indirect effect both in individual and dyadic level (actor- and partner-oriented), while the other two strategies had direct and indirect effect only in individual level (actor-oriented only). Moreover, the couple-oriented and the social comparison effects from APIM were also found.

Key words: conflict between husband and wife, conflict-coping strategies, marital quality, married couples, Actor-Partner Interdependence Model.